

読書

今週の本

▽ゲーデル、エッシャー、バツハ
▽アフリカ人はこう考える

新刊の志

▽オプシヨ金融市場
——タックス・ヘイブン——の研究
▽マスコミ報道の責任
▽政治理論のパラダイム転換
読書ノート
ソフトな国アメリカ……日下 公人



ダグラス・R・ホフスタッター著
野崎昭弘・はやし はじめ・柳瀬尚紀訳
『ゲーデル、エッシャー、バツハ』
——あるいは不思議の環——

精神の働きを探るファンタジー

評者 橋爪 大三郎

☆この五月に翻訳が発表されるや、たちまちベストセラーとなった話題の書。あなたの書棚にも、きっと一冊収まってるでしょう。だがこの厚さはどうだい

友人にも訊いてみたが、全部読みましたなんてのはひとりもいなかった。かく言う私も書評の手前、一週間がかりでやっと目を通した次第。
書評もいろいろあるので、購入の手引き。読解の指針。しかしこんな出遅れ

不思議な本

☆この本には不思議なところが多い。まず、どうしてこんなに厚いのか？
ぶ厚い本というと、専門書と相場が決

書評が今ごろビュリツァー賞まで受けた本を相手にそんなまねしても、気の抜けたビルミたいなものだ。こはひとつ、買うには買ったが読むつもりのない大多数の読者のために、『要するに』ゲーデル、エッシャー、バツハ』という本にはなにか書いてあったのか？の報告を試みることにしよう。ついでに、どうしてこの本が流行るか、といったあたりにも触れてみたい。

Douglas R. Hofstadter 一九四五年ニューヨーク市に生まれる。父親はノーベル物理学賞受賞者のロバート・ホフスタッター。一九六五年スタンフォード大学を卒業、一九七五年オレゴン大学で学位を取得した。インディアナ大学コンピュータ科学の準教授を経て、現在はミシガン大学心理学部に所属、人工知能の研究に取り組む。

微なのだ。

この本も、そんなつかしい時代の記憶を漂わせている。とりあげられている話題について、別に何冊も本を読む（読んで）ことを想定していない。著者ホフスタッターも、一五歳の聡明な少年に読んでもらいたい本だ、とのべている。というよりこれは、著者が紡ぎだした、まさきき自分が少年にかえてのめりこみたいミクロコスモスではないか。

著者は明敏・博識。また、素人意識して親切（を通り越したサービスマン）である。そのくせ、いやな啓蒙具がない。それはたぶん、著者がいちはん、この本で遊んでいるせいだろう。ゲーデル（すっかり有名になった、「不完全性定理」の張本人）、エッシャー（パラドクシカルな不思議の画家）、バツハ（言わずと知れた、調性音楽の巨匠）——この

三者は彼のおはこ（昔からの遊び友達）だ。そしてこのもつれた関係をおしり、彼は自分の本業（人工知能研究）の行く手に夢を描くのである。

ゲーデルが主役

☆さて、専門的な観点からみればどうだろう。率直に言うこの本は、本質的に新しい知見をつけ加えるものではない。たとえばゲーデルの定理についてなら、数学基礎論や計算理論のいい本がいくらも出ている。エッシャーにしても、ついに紹介されているわけだし、バツハはなおのこと。そのほか遺伝子論や人工知能といった、盛り沢山の話題についても同様である。この程度なら、ちよとした読書人は知って当然のことばかり。しかもその紹介がなにかまわりくどく（正直いらいらさせられる）、おまけ

に至るところ、アキレスと亀の対話が割って入るとききている。ゆえに、こうした分野に詳しいひとは、わざわざこの本を読むには及ばません。
ということか？ はたけ違いの三者と合わせの妙をねらっただけのゾッキ本か？ とんでもない。この冗長なところが曲者なのだ。

☆もうひとつ不思議なのは、ゲーデル／エッシャー／バツハの関係。はじめの二人だけなら似てて当たり前という気がするが、全体となるとどうも掴みにくい。
三者のバランスから考えると、何とんでも、ゲーデルが中心です。エッシャーはその「図解」。バツハはその主題の反復・変奏を分担する、という役割回りだろうか（忘れないうちにつけ加えておけば、本書の、ゲーデル紹介の部分はなか

なかよくできていると思う。あの「不完全性定理」はじつは、解釈のほうが目ざすかしいので、表記／表現の区別から出発する著者の解釈は説得的。そこでだけ読みたいひとは、第八章、第九章の後半、第十三章、それから特に第十四章を御覧ください。

本書でのべられている著者の考えを、あえてまとめれば、つぎのようになる。——ゲーデルの定理が教えるように、無矛盾（かつ自己言及するほどに複雑）な形式体系は、不完全である。だがその事実が、致命的でない。というのは、われわれ（の頭脳）はそうした形式体系のひとつに支配されているのでないから。ぎやくに、そうした形式体系をひとつのレベルで運行させているような、多レベルな構成をもつのだ。そしてこれらのレベルは、ゲーデル型性のおかげで、しばしば互いにもつれあっている。

新刊案内

85年11月

講座 現代日本社会の構造変化

全6巻 刊行開始

変貌をとげた日本社会の全領域を分析し展望する

- ①現代日本社会の構造変化と国際化
- ②現代日本の国家と法
- ③現代日本の資本主義
- ④現代日本の企業・経営
- ⑤現代日本の生活構造
- ⑥戦後価値の再検討

3現代日本の資本主義

大藪輝雄・奥地 正・甲賀光秀編
第1回記本 A5判並製 2800円
70年代以後の構造変化と改革の展望

現代経済学の新展開

荒瀬治郎先生還暦記念論文集
編集代表時子山和彦・美濃口武雄・武隈慎一 A5判箱入 6700円
専門化と細分化が進むなかで多分野の研究者が協力して現代経済学の概念的展望を描きだそうとの趣旨に基づいて編まれた。論文21編を収録。

伝統産業論

その国際性の研究

磯部喜一著 A5判箱入18000円
マス消費社会の中で手工性と郷土性を保ちつつ伝統産業はいかに生き残るか。歴史的分析和現状把握のもとに将来展望を行った研究の総決算。

特許関係条約

工業所有権実務シリーズ

橋本良郎著 A5判カバー付 2800円
特許制度の国際化への動きは目ざましく各種の特許関係条約が実施されるようになった。それらを広く鳥瞰しつつ実務面から解説した好指針。



東京・神田・神保町
☎ 03-264-1311

ここに精神の働きを理解する鍵が潜んでゐる。

議論の基本線は、明らかにこの方向をむいている。けれどもこれだけ言うのなら、ゲーデルの定理の紹介あたりから始めたとしても、本書の何分の一かで足りたろう。それに、著者も謙虚に認めていることだが、人間の心や人工知能の研究にゲーデル型性がどこまで決め手になるかは、まだ未知数なのである。これではパンチの弱いことおびただしい。随所にみられる非凡な着眼は、じゅうぶん刺戟的だとしても。

バッハのスタイル

☆でも、こんな読み方しかなかったら、著者に笑われるのがおちだ。なにかよいことが書いてないかなとおもってページからページを捜しまわるのが、無粋なんである。むしろこの書物の本領は、その構成にあり。一個の芸術作品として、この書物を鑑賞してみること。

だからとやたら長たらしいところが曲者だ、とのべた。この冗長さには必然がある。エッシャーの絵にあつたのを覚えていたろうけれども、四角い建物の屋上をぐるぐる昇り(降り)続ける「群のひとびと」というより、ひとりの人物なのか(「上昇と下降」という題が

ついていて、本書第六図に収められていて、昇って(降りて)いたはずなのに、いつのまにか元のところに戻ってしまう

「不思議の環」。これは、遠近法という知覚のトリック(絵画上の制度)を逆手にとって、もう一段トリックを加えたものだが、肝腎なのは、局部をいくらよく見ても、遠近法のリアリティーが保たれていて、トリックを発見できない点なのです。

私のみるところ、たぶんこの本もおんなじで、各章をみるといかにも普通の本(学説紹介)のようなのに、全体としては「不思議の環」のかたちになっている。細部のもっともらしさを捨てるために、だから、どうしてもこれくらいの分量は必要だったわけだ。

同じ主題が繰り返えし、変奏されていくこと。あるいは階層的に上昇(下降)しても、元の主題が保存されること。こうした自己繰り返いのもつれあひからなる円環を、著者はバッハの精髓とみなす。したたかなことに、著者は、これを自己解釈として、自著に組みこんできているのだ。アキレスと亀の奏でるカン。この間奏/本文は、どちらが図/地になつていとも言いきれない。

☆というわけで、本書とバッハの繋がり、は、「多声性 Mehrstimmigkeit」にあると言えまいか。作品の構造は単一の声

部によって担われるのではない。もつと大きなところで組み立てられている。従来、書物は、メッセージをたかだかひとつのレベルでのべ伝えるにすぎなかった。ところがホフスタッターは、別な可能性を想いえがく。で、バッハのスタイルを大々的にとり入れる。この思いつきだけでもちよいとしたものなのに、それとにかく一冊に仕立ててしまったのだから、大した手並みだ。

アンチ・イデオロギー

こうした『ゲーデル、エッシャー、バッハ』を、究極的なアンチ・イデオロギーの書とみなすこともできよう。D・ベルのような旧式の反イデオロギー論は、だらしないうちにそれ自身やはりイデオロギーたるにとどまっていた。それに対して本書は、その構成そのものがイデオロギーの不能を告知する。マルクシズムをはじめ、どんなイデオロギーにしても、必ずある形式体系のかたちを表明される。それは世界を含みこむと称する(が実は世界に含まれている)。だからその主張の妥当性は、システムを「離れる」ことではか確認できないわけだ。著者ははじめから、自分の主張を単純な言葉のなかでのべようなどと思っていない。そのかわり、話題を切り換え、多く

の声部をおして語り(対話編)、ゲーデルの定理のあとさきを行きつ戻りつしてみせる。

こんな具合に書き上げられた本書の不思議なスタイル。これは、ゲーデル型性を人間精神の深いところに想定する著者の思想の、最高の表現になっている。これ以外に、ちよつと考えられないほど。ただここには、論証が欠けている。そこで著者の思想は、ファンタジーにまわられている、とみておくのが正確だろう。

するところという本をつかまえて、そのイデオロギー性を云々する手合いが出てくるものだ。無駄はよした方がいい。私は著者の姿勢に(少し自閉症ぎみとしても)しごく健全なものを感じた。こうした創意を積極的に評価するアメリカは、捨てたものでないよ。もつとも日本の読者の場合、マルクシズム虚脱症候群にゲーデルメンタムがよく効くという評判もあり、あまり解りもせんうちからやたらもてはやすのがある。どうかと思うが：

☆おしまいに忘れてならないのは、三人の訳者の活躍。野崎昭弘・はやしはじめ・柳瀬尚紀と、いずれ劣らぬ達者ぞろい。お陰で、原書を読まずに済みました。ともかくご苦労さまでした。

(評者は社会学者)
(白揚社 四八〇〇円)